

## 人間の認知力と ICT

調査理事 佐古和恵



ICTの進展が目覚ましいことは、誰の目にも明らかであろう。本分野の研究者並びに技術者の絶え間ない努力によって、今後より速く、より大量に、より多様な情報通信が可能になるに違いない。そしてそれは安全、安心、効率的で公平な豊かな社会を実現する重要な要素であることも間違いない。しかし、ICT発展の恩恵を受ける社会を構成する「人間」の観点はどうであろうか。残念ながら、現在のICTの有様を正確に理解して正しく使いこなせるほど、人間は追いついていないのではないだろうか。

例えば、数人で乗り合ったエレベータの中での会話。人間は自分の体験から、エレベータの中で話したことは他人に聞かれる可能性があることを認識でき、小声で話すなどの対策がとれる。つい夢中になって大声になったときには、辺りを見渡して誰に迷惑をかけたのかを確認することもできる。しかし、ネットでの会話はどうかだろうか。意図した相手以外に、誰に発言が届くか認識できるだろうか。しかも届く人は現存しない、30年後の自分の子孫かもしれない。そのような状況で自分の発言のインパクトを理解するのはかなり困難だ。

会話だけでなく、本や手紙、新聞なども、電子化されて人間が今まで認識していたものとは異なってきた。何時何分にどの箇所を何分かけてどこで読んだか、従来自分でも知覚することのなかった情報まで記録することができるのだ。しかもこれらの情報を使って、いかに他社とは違う利益を上げられるか、必死にビジネスを考える人たちもいる。新しいサービスによって、ユーザが便利になる場合もあろう。ただ、自分さえ認識していないデータが取得され、利用される可能性やインパクトを、人間はどう認知できるだろうか。

ICT自身も日々賢くスマートになっていく。初めて接した時点とは異なる機能をいつの間にか持っている。例えばWebページ。URLで指定されたページはどこの誰が見ても同じであった時代は過去のものである。アクセスしてきたユーザの属性によって、サーバが表示を変えることはネット広告のように朝飯前だ。米国ではユーザの所在地によって、ホッチキスの価格を変えるショッピングサイトも存在した。表示がパーソナライズされるメリットもあるが、本質的に同じ内容が表示されていることをどう担保できるのだろうか。

そして、ICT機器が提示するデータを盲目的に信じてはならない。機器への入力も、アルゴリズム設計も、人手で行われるものである。出力結果が単なる推定値である場合も、データが一人歩きしてしまわないだろうか。最新のシステムが表示した推定場所の誤差により、救急車の到着が遅れた悲しいニュースがあったが、そうならないように、私たち技術者に何ができるだろうか。

近年、欧州で興味深い概念が提案されている。Right to be forgotten, 日本語でいうと「忘れられる権利」だろうか。人間はそもそも忘れっぽい性質があるから、権利と主張しなくても時間がたてば自然と忘れてもらうことができた。あるいは、口伝えやうろ覚えで情報が事実と異なる経験があるので、誰かが昔のことを言っても、信ぴょう性と合わせて検討することが常であった。ところがICTの発展により、あらゆるデータが長期間、そのままの形で残るようになった。そこで、「忘れられること」というのが、人間にとって重要であることが認識されたのである。

このように、ICTが発展した社会において、改めて人間に必要なことの本質を認知して、何が起きているか人間が認識できるような仕組み、あるいは、人間に悪影響が及ばないような仕掛けを追加する必要がある。人間がICTの有様を正確に理解して正しく使いこなせて初めて、本当の意味で安全、安心で豊かな社会になるのだと思う。そのために私たちにできることを、是非今から一緒に考えてほしい。